

「自分の弱さをいとおしむ」庄井良信／著 高文研 2005年10月発行
2階一般開架図書（請求記号:371）

著者は臨床教育学というものの研究者である。若い頃は、弱音をはくなど励まし、強さを見つけては評価し、前へ前へと押し出すことが「教育」「指導」だと思っていた、という。

日本は今、おまえは「人材」としてなんぼのものかという問いの強い社会になり、大人も子どもも不安の中で生きている、との著者の言葉に頷けるものがある。

この本では、「しみりと」とか「とぼとぼと」などのような言葉が印象的だ。OECDの学習到達度調査でトップのフィンランドには、この言葉がよく似合う。自分の弱さも人の弱さも受け入れて、共に生きる社会こそが成熟した社会なのだろう。日本の順位が後退したと騒がれているが、皮肉に感じられないか。

「文と本と旅と」上林暁／著 五月書房 1959年5月発行
2階郷土資料開架コーナー（請求記号:K914-カン）

上林暁の随筆には、不思議と長く後に残るような読後感がある。彼の描くなんでもない出来事、なんでもない風景、なんでもない会話が、ずっと後になってひょっこり思い出されたりするのである。

この本も読了後にしみじみした気分にも包まれる。文、本、旅、酒の4つの章立てで、それぞれに幾つかの小文が収められているが、旅の章では「南の正月」、「海村行」など、彼の郷里である幡多郡田ノ口村（現、黒潮町）の思い出を綴った小品も含まれている。